

連用・連体を考える

学習院大学 2010年12月19日(日) 開場12時半・開演13時

■接続節と近い意味合いをもつ連体修飾節 大島資生(東京大学)

■連体修飾・連用修飾の日中対照 橋本修(筑波大学)・渡辺昭太(東京大学大学院)

■複文における連体修飾節と連用修飾節 前田直子(学習院大学)

■「体・用」の別と修飾 山東功(大阪府立大学)

パネルディスカッション「連用・連体を考える」 指定討論者 井上優(国立国語研究所)

※「連用・連体を考える」の参加費は学生・社会人ともに資料代として500円となります。

シンポジウム参加お申し込み方法

事前申込みが必要となります。

以下の内容をメールにてお送り下さい。参加を希望されるシンポジウムのタイトルをお書き忘れのないようにお願いします。

参加申込みのメールアドレス sympo_20th@hituzi.co.jp

件名(subject)に参加されるシンポジウム名をお書きの上、メール本文に、

○参加をご希望されるシンポジウムのタイトル

○お名前

○ご所属名・勤務先

○ご住所(市町村名まで*)

○メールアドレス

○コメント(この講師にこういうことをお聞きになりたいという内容などございましたらお書き添え下さい。)

*差し支え無いようでしたら、どこから来られるのかを知りたいと思いますので、都道府県名から市町村名をお教え頂けると幸いです。お知らせいただきました情報は、本シンポジウム開催の運営のためにのみ使用し、他のことには一切使用しません。

電子メールなどの通信手段をお持ちではない場合は、ファックスにてお申し込み下さいますようお願い申し上げます。ファックス番号:03-5319-4917

どうぞお誘い合わせの上、ご参加下さい。本催しにつきまして、ブログでの紹介、twitterでのtweet、関心をお持ちの方にお知らせ下さるなど、お助けいただけましたら、幸いです。

予定通りの開催をすすめて参りますが、不測の事態により急に予定が変更になることがあるかもしれませんので、シンポジウムサイトを随時ご確認下さい。<http://www.hituzi.co.jp/sympo/>



ひつじ書房

〒112-0011 東京都文京区千石2-1-2 大和ビル2F <http://www.hituzi.co.jp>
TEL 03-5319-4916 FAX 03-5319-4917 toiawase@hituzi.co.jp



ひつじ書房 20周年記念シンポジウム

■可能性としての文学教育

場所 日仏会館(恵比寿)

日時 2010年9月23日(木・祝日) 開場12時半・開演13時

■書くことの倫理

場所 日仏会館(恵比寿)

日時 2010年9月26日(日) 開場12時半・開演13時

■連用・連体を考える

場所 学習院大学

日時 2010年12月19日(日) 開場12時半・開演13時

■房主より シンポジウム開催にあたって

ひつじ書房は、1990年に創業しました。おかげ様で20周年を迎えることができました。これもみな様のご支援のおかげです。20周年を記念しまして、3つのシンポジウムを企画しました。

学術書の出版社の根本として目指したいと思っていることが、4つあります。1つは研究者とともにあること、2つ目はより広い議論につなげていくように読者とともにあること、3つめは今の時代における出版の公共性、4つ目は商業的に成り立ちにくい研究書出版をなりたせることです。

電子書籍が喧伝されていますが、議論を蓄積し、記憶化し、読者という他者との遭遇(公共性)を後押しするという役割は、媒体をこえて、いっそう重要性を増しています。日本語による言語活動の認識における重要な概念、体と用について振り返ることは、西欧の言語学と日本語学のために機縁となるはずで、加えて、インターネット時代、書くこと読むことの捉え直しは文学研究、文学教育研究に、ひいては言語学・言語教育にも意味のあることと思います。

21世紀の社会・情報環境の中、私たちは21世紀の出版社、どのような役割を担うのかを模索して、次の10年を乗り切っていこうと決意しています。今回のシンポジウムがこれからの研究に新たな局面を生み出してくれることを祈っています。多くの方のご参加をお待ちしております。

可能性としての文学教育

日仏会館（恵比寿） 2010年9月23日（木・祝日） 開場 12時半・開演 13時

13:20-13:45

■ **国語教育がなぜ文学教育になったのか、の起源について** 山本康治（東海大学短期大学部）

「国語教育」というと、文学教育を思い浮かべることが多い。これは多くの日本人に共通することがらである。しかしながら、このような国語教育＝文学教育という捉え方がなぜ多くの人々にとって「自明」のこととなったのか、そのプロセスについて、これまであまり明らかにされてこなかったようである。

本発表では、明治三十年代に教育界を風靡したヘルバルト派教育学と「改正学校令」（明治33年）との関係を踏まえ、「美感」による「人格の陶冶」を目指す同教育学が、国語教育に童話や詩を教材として求めた背景について明らかにし、また、同教育学に拠った教育実践が、東京高等師範学校を頂点とする教育ヒエラルキーのもと急速かつ強力に全国の教育現場に浸透した結果、国語教育＝文学教育という共通認識が形成されていったことについて明らかにしたい。さらに、そのことが何をもたらしたのかについても触れていければと考えている。

13:45-14:10

■ **楽しい音楽分析～イメージを広げる楽譜の読み方** 岩河智子（作曲家・札幌室内歌劇場音楽監督）

音楽分析（アナリーゼ）とは、楽曲の中のいろいろな事件を発見することだ。目のつけどころはいろいろ。旋律の動き、リズムの対比、バスのさまざまな特徴。和声（ハーモニー）や転調のプランはまず第一に考えたいことだ。時には楽曲全体を図解して大きな見取り図を把握することも大事だ。

アナリーゼをして音楽の出来事が浮かび上がり、曲の姿が明らかになると、自分自身のイメージが大きく膨らむ。演奏家は強弱や音色、テンポなどのアイデアがわき、確信を持って演奏することが出来る。音楽の聴き手はより深く内容を味わい、いろいろな演奏を聴き比べる時の揺るぎない手がかりを得る。

今回は、クラシックの名曲（ベートーヴェン交響曲第5番「運命」1楽章）、および愛唱歌（「雪の降る町を」）の2曲をとりあげる。一見難しいクラシックの曲が解りやすいドラマで仕立てられていること。そして、なじみ深い愛唱歌が深い奥行きを持っていることを発見して頂きたいと思う。

14:20-14:45

■ **文学教育の実践における読みの理論の必要性あるいは困難について** 相沢毅彦（早稲田大学高等学院）

「文学理論」と聞いてどのようなものを思い浮かべらるうか。あるいは「文学理論」を国語の授業に導入すると聞いて。

時々、文学理論を国語の授業、あるいは文学作品の読みの方法として導入しようと試みていると話す、ある文学理論的な枠組があって、単にそれを作品の読みに当てはめることなのではないかと思われてしまうことがある。しかし、僕にとって理論を使った読みの行為とは、ある決まった型を当てはめるものではなく、どのような姿勢で作品と向き合うのかという自らの世界観認識の問題としてある。自らの世界観認識を問うことは読みの固定化・限定化を齎すのではなく、むしろ理論的な方向性を明らかにせず、漠然と読んでいる時よりも、読みをひらいていく可能性と繋がっているのではないかと考えている。

文学理論の必要性やそれに伴う困難さなどの問題を通して「可能性としての文学教育」についてみなさんと共に考えていけたらと思う。

14:45-15:00

■ **二十一世紀における文学教育の意義（講演補足＋まとめ）** 助川幸逸郎（横浜市立大学非常勤講師）

言葉そのものを読み解く〈方法〉——それを欠いた文学教育は、「道德教育のまがいもの」になる、あるいは、教師の意見のたんなる押しつけになる。

国語教育にたずさわる者は、古くからその事実に自覚的であった。そしてたゆまず、〈方法〉の模索を続けてきた。西郷竹彦の文芸学や、向山洋一・宇佐美寛らの言語技術教育などは、そのよく知られた例である。

それらにおいては、語り手の視点のありようや、作中に描かれた情景といったものを読みとることが目ざされる。「読者の主観に左右されにくい要素」を正確に把握する力を、子供たちにつけさせよう、というわけだ。

そうしたもくろみが、有意義であることは間違いない。が、それはあくまで、「文学テキストの読解方法を教えることには、あらゆる児童生徒にとって意味がある」という前提に立っての試みであった。現在、中学高校の国語から文学教材を外し、論説文の読解のみを行なうべきだという議論が起こっている。そうした状況にあって、文学教材の読解方法を万人が学ぶ意味を提唱する根拠を、従来の〈方法〉をめぐる議論は提示しきれていない。

本発表では、文学教材をいま、教えることの根源的意味を問う。さらに、小説と韻文作品を、同じ「文学教材」として扱ってよいかどうかという点にまで、議論を広げたい。

15:15-16:30

パネルディスカッション

会場（恵比寿）

※「可能性としての文学教育」、「書くことの倫理」は、専門高校生・大学生の参加費は無料です。大学院生および社会人は参加費 1,000 円となります。

書くことの倫理

日仏会館（恵比寿） 2010年9月26日（日） 開場 12時半・開演 13時

13:20-13:45

■ **電子化によって書物／文学とそのディスクールおよび受容にどんな変化が生じるのか**

前田壘（文芸批評家）

大仰かつ大風呂敷的な演題だが、その主眼はふたつ。そしてそのどちらも、本来とうに私たちが知っていることである。ひとつには、書物／文字（とそのディスクール）が、書き換え可能なデバイスを持つことで、その存在じたいどう書き換わってゆくのか。もうひとつには、そもそもディスクールは受容時点で意味決定がなされるというテキスト論的な捉え方において、受容の様態に変化が生じることは、ディスクール（の意味決定）自体にどのような変化を生じさせるのか。捉えがたい未来について、文学の領域がそこでどのような役割を担うのかとともに可能な時間内で整理・検討する。

13:45-14:10

■ **名作は誰のもの？ ～アメリカの読み捨て本 vs. 明治文学の金字塔** 堀啓子（東海大学）

「外国語の読める者は何も幼稚な頭から生み出した愚にも付かぬことを並べて見るよりかせつせと翻訳をして見るが可い。翻訳をすると、原書の思想も味へるし、且文章の稽古にもなつて一挙兩得だ。」そう、弟子に説いたのは明治の文豪・尾崎紅葉である。紅葉みずから実践していた〈翻訳〉には、今でいうところの〈翻案〉も含まれる。〈翻案〉とは、原作の大筋をまね、細部を作り変えることである。明治時代、〈翻案〉は多くの作家たちの、ごく日常的な作品発表の手段であった。そして正岡子規が語るとおり、当時は〈創作〉が〈翻案〉とみなされることを榮譽とする向きさえあったのである。じっさい原作さえ明らかにされないこれらの〈翻案〉のうちに、明治の多くの名作が生みだされた。

本発表では、こうした明治の日本文壇における作品生成の過程を、同時代文人の著作権意識にからめながら、考えてみたい。

14:20-14:45

■ **国際金融とネット言論の倫理～メタレベルなき世界での合意形成をめぐって** 岡川聡（金融問題研究者）

リーマンショック以降、金融市場という名の各種電子取引空間は、一般的にはハイエナの跋扈する無法地帯・無秩序なパワーゲームの場として捉えられている。確かに世界の金融市場を統括する政府・国際機関は存在しないし、市場の規模・無国籍性・変化のスピードを考えると、今後一層ウエ／オカミからの統制は効かなくなってくるであろう。そんな環境下でも実は金融市場内には一定の秩序が存在し、緩い内部規範の下、自己審査に基づく内在的罰則により各種取引は有効に成立している。その秩序を守らんとする内的動機を「流動性の倫理」と名付け、自然発生的に成立した外国為替直物市場を題材に考察してみたい。また「流動性の倫理」を用い、政府・国際機関と市場との今後の在り方を考えてみるのが、現在のメディア状況下で『書くことの倫理』を考察する上でも、有効な手掛かりとなることも明らかにしていきたい。

14:45-15:00

■ **フェティシズムの現代的意義（講演補足＋まとめ）** 助川幸逸郎（横浜市立大学非常勤講師）

十五年ほど前まで、不特定多数の人間に発信される情報は、出版社や放送局といった特定の場所から発信されていた。そして、「この情報は、公にする意義のあるものなのか」・「これを公にすることに、倫理的な問題点はないのか」などについては、編集者やプロデューサーのチェックを経ることが建前になっていた。

現在では、誰もがウェブ上に情報を乗せることができ、その情報は不特定多数の人間の目にさらされる。これは、一見したところでは脅威である。たとえば、あるラーメン屋について、そのラーメン屋のライバル店のオーナーが根拠のない悪口を書いても、まっとうなラーメン評と見かけの上で区別がつかないのである。

しかし実際には、えたいの知れない書き手の「つぶやき」を、無条件で信用する読み手は少ないはずだ。ウェブ上の情報が玉石混淆であることは、ほとんどの人間が承知している。問題はむしろ、自分自身や、自分がこだわりを持つことがらについて書かれた「不本意な情報」を、それを読んだ誰もが信じるに違いないと思ひこむことの方にある。ネット言論の異様な排他性や、ブログの「炎上」といった問題は、そこから生じてくるのである。おそらく現在では、旧来のメディアを介した情報でさえ、「多くの人の目に触れること」と「信憑性や価値を認められること」が直結しにくくなっている。にもかかわらず、ウェブ上の「不本意な情報」に、われわれが過敏になってしまうのはどういうわけなのか。

本発表ではこの問題について、「フェティシズム＝呪物崇拜」という概念を援用して考察を加える。そのことを通じて、「ウェブ上の情報に触れるときに、われわれが念頭に置いておくべきこと」を、不完全であっても提示できればと考える。

15:15-16:30

パネルディスカッション

会場（恵比寿）